

## 1. こども会議



■オンライン開催で実施したこども会議

### こども会議

**実施日** 令和2年10月11日

**参加者** 新沼 南、三宅 友美、今野 愛太、近江 将貴、橋本 陸  
(9年前、震災から約半年後の平成23年9月のこども復興会議に参加した当時中学生だった5人)

**概要** こども復興会議に参加した当時と現在の復興に対する印象、これからの大船渡市に対して思うこと等の意見交換を行いました。

### 意見

#### 新沼

- 9年前のこども復興会議では、同じ事が起きる可能性があるという事を見据えたうえで、次の災害が起きた時に、ここでの経験を生かして、被害を抑える事を意識しました。
- 物理的復興も大事ですが、震災があったことをいかに後世に語り継ぐか、「過去にあった」で終わらせない何かが必要かと思っています。
- 教育について学んでいることもあり、子供たちが必ず行く学校で、その地域にあった防災教育をどう取り入れていけるかを考えています。
- 現在住んでいる新潟県上越市は中越地震の被災地なので地域の人とお互い話をしました。他人事には思えないので、違う地域でも覚えておく必要があると思いました。
- 県外に出ていて、大船渡の復興がよい方に変わっていることがなかなか伝わってきません。魅力が沢山ある所なのに、県外に出ると情報が途絶えてしまって、知っている人からしか情報が得られないのがもったいないと思っているので、大船渡市のよさを県外の人にもアピールした方がよいと思います。



## 三宅

- 9年前のこども復興会議では、その先10~20年という中で、市民の人たちが安心して暮らせるまちづくりが出来ればと思い、会議の中で嵩上げ道路の提案をしました。
- 復興に関しては、物理的などところで嵩上げ道路や防波堤などは十分に出来ているのと思いますが、これからさらに復興していく中で、震災を経験していない子供たちの意識をどうもっていくかということが必要だと思います。中学校で働いていますが、中学校より下の子たちは当時のことを覚えていないことが多いので、復興教育の中で地域を知る事や、様々な支援への感謝の気持ちを育てていくことで、さらに復興が進んでいくかと思っています。
- 高田の一本松のような、遠くの人が大船渡に来たいと思うような何か象徴的な物があれば、観光客などもっと人が来ると思います。大船渡に観光で来た人たちが、にぎわうようなまちづくりが出来たらいいと思います。
- 道路関係のところは9年前に望んだものが形になっていると思いますが、若者が行く場所、遊ぶ場所がありません。大きなところでなくてもいいので、遊園地や映画館、カラオケなどがあればいいと思います。
- 一度大船渡から出ましたが、最後には大船渡に戻ってきたいと思ってここにいます。今大船渡にいる人、一度出た人がまた戻ってきたいと思えるまちづくりが出来たらいいと思います。
- 今勤めている中学校の子は地元が好きな子が多いですが、これから出ていく子もいると思うので地域のよさを伝えたいです。



## 今野

- 9年前のこども復興会議で誰かが透明な堤防を作ったほうがいいと言った意見があり、プラザホテルの近くの堤防でガラスがはめ込まれているのを見て、これなのかなと思っていました。あの時の意見も反映されているんだと、感慨深いものがありました。当時は堤防を建てて、高台に建物を建て、水が来なければいいという考えでした。
- 住宅街、団地等の土地の整備は進んでいると思いますが、肝心な人がなかなか来ないところもあります。そういうところで寂しさがあるので、もう少し人を集められるような広報活動が必要だと思います。
- 道路の復旧に関して、電柱は道路に沿って建っていますが、道路が付け変わることに、電柱も何回もずらさなければいけなくて、仮に道路を通すにしても、ある程度、電柱を端によけておいて、その範囲内で道路を設ければよかったのではないかと思います。
- 復興によって道路に関しては、走りやすくなりました。釜石に行きやすくなりました。まだ整備が追いつかない部分もありますが、以前よりは走りやすくなった気がします。
- 中高生にとっての移動手段はバス、電車、自転車と窮屈なものばかりなので、もっと便利なものあればよいと思います。





## 近江

- 9年前のこども復興会議では、たくさんの方が死んだ事が中学生の自分には衝撃的で、いかにたくさんの人を死なせないようなまちにするかという事だけを考え、堤防を建て、避難経路をつくらうと考えていました。
- 物理的に津波だけの対策というよりは、医療体制を整えたり、被災者のメンタル面を整えていくほうがこれからは必要なのではないかと思います。
- 秋田県秋田市に住んでいますが、大船渡市との防災意識の違いをすごく感じています。大船渡は防災意識が高いと思っていましたが、震災後さらに意識が高まったと思います。大船渡出身ということでどこにいても被災の体験を聞かれます。
- 復興が97%進んでいると資料にありますが、なぜ復興という言葉を使っているのかなという印象はあります。震災当時の面影はありますが、もう新しい街として生まれ変わったと感ずるので、観光の面など次のステップに進んでいけばいいと思います。

## 橋本

- 9年前は大きな津波に耐えられる堤防が必要だと思っていましたが、消防の仕事については、自然災害の力に人工物で耐えることには限界があると感じました。堤防で津波を防ぐことはもちろんですが、住民一人ひとりがすぐに高台へ避難するという意識を持つことと、行政側は避難しやすいまちづくりを目指していく必要があるという考えに変わりました。
- 復興するにつれて、キャッセン等の商業施設ができており、観光客向けにサンマやつばきもPRしていますが、実際に大船渡に住んでいる学生や若い人たちが大船渡の魅力をあまり感じていないのではないかと思います。大船渡の自然の豊かさを生かして海や山のアクティビティを若者向けにPRできればいいのではないのでしょうか。

- 大船渡は勉強したいと思ったら県外に出ないといけないので、もっと高いレベルの教育が受けられる体制があれば、もっと活性化したいと思います。
- 大船渡は住むにはよい街だと思っているので、いずれは戻りたいと思っていますが、子育てをするにはちょっと弱いと思っています。「出る杭は打たれる」という風潮が強い街だと思っているので、子供の個性を開花させる、能力のある子をもっと高めてあげるところが強くなれば、まちが活性化したいと思います。

- 就職や進学で、一度大船渡から出ていく経験も必要だと思いますが、いつか戻ってきたときにやっぱり大船渡がいいと思ってもらえるまちにしたいです。
- 東日本大震災の時は寒い体育館で有り合わせの毛布にくるまって寒さをしのぎました。これからは寒さ、暑さ対策はもちろんのこと、プライバシーの確保など居住性のよい避難所を確保できればよいと思います。そうすることで、避難に対するハードルも下がり、結果的に減災につながるのではないのでしょうか。



■平成23年9月に開催したこども復興会議の様子

## 2.市民グループインタビュー



### グループ インタビュー ①

**実施日** 令和2年10月12日

**参加者** (社会人)志田繕隆、熊谷侑希  
(高校生)原佳祐、菊池麻友、小林友香、高橋真実、後藤陽菜

**概要** 大船渡市の復興に対する印象やこれからのまちに対して思うことの意見交換を行いました。

## 意見

### 復興を実感したこと

- この10年で変わった事は、最近、家の近くに団地が出来て、そこにバスケットコートが出来たので、バスケットボールをするようになりました。
- 震災の翌年は嵩上げで土が山盛りになっていました。そこから1年ぐらいは工事をしていても変わらなかった景色が、キャッセンや大船渡小学校の近くから嵩上げの土がなくなって、建物が建っていくようになりました。
- 小・中学校時代は仮設住宅があってグラウンドが使えない時期がありました。それが撤去されてグラウンドが広く感じました。
- キャッセンができて、お店が集まり、交流の場ができてよかったですと思います。
- 綾里では仮設住宅があった時はお年寄りが集まる所でした。公営住宅が建った後は、その付近で集まったりしているので、お年寄りの集まる場所が変わったと思います。
- 仮設住宅から上山に引っ越して、お祭りの音などが聞こえる様になりました。
- 大船渡小学校への通学で道路整備をしていて危なかったし、遠回りをしていた時もありましたが、今は落ち着いていて安全だと思います。

### 復興について思うこと

- キャッセンよりも屋台村の方が、味があってよかったと思いますが、本屋等、屋台村にはなかったお店が入っているので、それはよかったと思っています。
- 三陸沿岸道路が出来て色々な所に行くには楽になりましたが、車の流れが変わったことでなくなったコンビニもあるので、便利になりましたが不便になったところもあります。
- 震災の後は「よそ者」が多くいましたが、今はいなくなって寂しいなと思います。NPOの友達は今も誰もいなくなってしまいました。
- 工事が落ち着いて安全になったら、宿泊の客層が激変しました。だいたい4年くらい前(平成28年頃)が境だったように思います。震災直後は、いつもたくさんのお客様にご利用いただいております。まちびらき以降、工事関係者が減少し、宿泊者も減りましたが、最近は、旅行者が増加しています。
- 市外で被災して大船渡市に引っ越してきましたが、被災した家のローンが払い終わっていないうちに流されて、また新築で家を建てたことで土地代と家の代金と前の家のローンもある状態で、それに対する補助金が少なく、再建の費用に困っています。
- 東京に住んでいた頃は、被災地は大変で可哀想だと思っています。



ましたが、大船渡に帰ってきたらパチンコ屋が多くて、昼間から賑わっているのを見て、少し複雑な気持ちです。

### 大船渡のまちについて

- キャッセンのような新しい店が出てきた一方で、盛方面で今まで使われていたお店で、空き家や締め切っている所が多くなり暗い印象があります。
- キャッセン周辺では栄えて賑わっている所とそうではない所の境がはっきりして見えます。
- 大船渡では服を買えるお店が少なく、買いに行くなら、車で釜石や盛岡まで行くかネットで買います。
- ボーリング場等遊べる場所がほしいです。
- 大船渡でも大学のオンラインの講義が受けられるようになって、田舎だとか都会だからというのは、コロナのお陰でなくなって、よかったと思っています。

### 地域のコミュニティについて

- 末崎は、平成30年から町民運動会が再開されて、地域として参加して、みんなで何かをするというのは初めてだったと思います。ほとんどが団体競技なので始まってしまえば皆さん仲良くやっていました。震災から時間の経過とともに行事等もあったりするので、顔を合わせる機会が増えていると思います。コロナ前までは改善していましたが、コロナが始まって、また個々の家にもってしまう状況になりました。
- 仮設がまだあった頃は、なじめない人がいる話を聞いたこともあります。最近は諦めたというか、みんな、独立してそれぞれの所でやっていかなければ、となつたのかなと思います。
- 令和2年3月で吉浜中学校が閉校して大船渡第一中学校に統合されました。人が少なくなって仕方ないですが、登校時間が早くなってしまい大変だと思います。
- 綾里は大船渡の中でかなり田舎なので、お店も19時には閉まりますし、住みやすいとは思いません。

### これからの大船渡のまちに対して思うこと(高校生)

- 活気というか、お店とかも全体的ににぎやかになっていけば大船渡を出て行った人も戻ってくるとよいと思っています。
- 大学進学などで、大船渡から出ていく人が多いです。大学進学となると県外しかないと考えていて、県外に出た自分が戻って来たいのはどういう時かと考えたら、自分の住んでいるまちが、笑顔があふれていたり、若い人も一緒に楽しめる場所があれば、戻ってくると思います。
- 大船渡と東京等の都会とのアクセスが良くなれば大船渡でも住みやすくなると思います。
- 市外にいる親戚に話を聞いた際には、働ける環境を整えてほしいと言っていました。
- 地元に残っている人は、就職が困難で家の家業を継ぐ形で仕事をしているイメージがあります。仙台とかに人が多く集まる一方で大船渡の人口が減少しているのも事実で、この地ならではの仕事で、お金を稼ぐのは現状では難しいと思います。
- 交通面でBRT等便利だと思って利用していますが、老後、住み続けると考えた時に、車もずっと運転できるわけではないので、公共交通が充実していないと不便だと思います。



### これからの大船渡のまちに対して思うこと(社会人)

- 高校生の時は、大船渡が大嫌いが出ていきました。都会で生活してまた戻ってきて不便かなと考えた時、そうは思いませんでした。震災後にコンビニが増えたので、そんなに不便は感じないです。時間がゆっくり流れていて暮らしやすいです。若い頃と求めているものが違うのだと思います。その土地で、よい事もあれば悪い事もあって、都会のよさを大船渡に求めてもいけないと思うし、大船渡にしかないよいものがあると思います。
- 高校生は卒業すると市外に出て行ってしまいます。私も一度出て行った時は、地元に戻ってきて友達もいないし、魅力的な仕事もないし、不便だと思っていたので帰るつもりはありませんでした。帰ってきた理由は、親と一緒に住みたい、家族の近くに住みたいという思いが強かったからのような気がします。震災で家族とバラバラになったり、家族を失った人もいたので、家族と住むのが最後なのかなと思いました。
- 大船渡にはあまり変わってほしくないです。田舎らしくてよいと思います。大船渡に都会を期待して来る人はいないし、都会になるのは無理だと思います。与えられた条件の中で、幸せに生きようと思ったら、現状を受け入れるしかありません。田舎で何が悪いのかと思います。インターネットで注文が出来て、翌日には届く世の中で、コンビニもあるし、そんなに困る事はないような気がします。
- 自然豊かで、サンマが不漁だとは言っていますが食べる物も美味しいし、充分満足だと思っています。
- 都会に行った方が年収は絶対に高いですが、大船渡にいてお金はそこまで必要なく生活は出来ています。年収が少なくても生活が貧しいかと聞かれてもそうでもなくて、それは悲観することではないと思います。
- 高校生はいろいろな事を勉強して社会に出ていこうと思いますが、何が出来るようになっていけるかが大事であって、何が出来る様になっていけば、大船渡でも十分に収入を得られる仕事はあると思います。ここにいる高校生たちが大人になった時は、親と同じような世の中ではないので、それはこれから勉強しながらよく考えていったらいいのではないかと思います。



## グループ インタビュー ②

**実施日** 令和2年10月19日

**参加者** (社会人)今野凌、菅野香澄  
(高校生)及川隼人、石橋勇典、炭釜大地、佐藤水綺、志田菜々花

**概要** 大船渡へのU、Iターン者の社会人と高校生による大船渡のまちの復興や社会についての意見交換を行いました。

## 意見

### 復興についての印象(高校生)

- 高台は復興が進んだとは思いますが、その周りがまだという印象です。
- 復興の実感はガレキがなくなったことが大きいです。消防防災センター付近がきれいになったという印象が強くて、道等もきれいになって、ここだけ新しいという感覚は強かったです。

### 復興についての印象(社会人)

- 震災後に北里大学のキャンパスがなくなり、若い子たちがいなくなりました。自分も含め大学で市外に出てから帰ってきた人はあまりいません。復興で建物が新しくなっているとは思いますが、もうちょっとかなと思います。

### 大船渡でのまちについて思うこと(高校生)

- 仙台の大学で勉強がしたいです。大船渡にはたまにふらっと帰れたらいいかと思います。
- できれば住み続けたいと思います。
- 小さいときに郷土芸能、権現様や鹿踊り、ソーラン節をやっていた楽しかった思い出があります。
- もっと若者が暮らしやすいまち。おしゃれなお店や遊べる場所があるとよいです。
- これからまちが活性化して生活しやすくなってほしいです。人とのつながりは田舎らしくあってほしいと思います。
- 盛商店街が閉まっているので活用して活性化できたらよいと

思います。盛商店街付近の歩道や国道45号の道路など、狭かったり、傷んだままなのでもう少し整備されていたらよいと思います。

### 大船渡でのひとのかかり方についての印象(社会人)

- 県外から引っ越してきて、大船渡に来る前は、津波が来た市というマイナスのイメージしかありませんでした。始めは知り合いもいなくて、何も知らない土地でしたが知り合いになった人が何かしら気にかけてくれて、自分の地元とは違う人たちの暖かさがありました。単に大船渡イコール津波が来た市、というイメージではなく、プラスのイメージを持つようになりました。それをこれから来る人にも伝えたいと思います。
- 大船渡の人は温かみがあります。郷土芸能で出ていると、年上の人たちとつながれて何かあった時に助けてくれます。
- 歳が離れていても、礼儀がありつつ仲良くできる関係の人が多くて、人生の先輩でもあるので、いろいろ教えてもらえます。

### 大船渡での暮らしについての印象(社会人)

- 子育てで支援は充実していますが、遊ぶところがありません。そういうところが昔と違って、昔あったおもちゃ屋がなくなったし、公園に行くとうるさいと迷惑がられるとたまに聞きます。自分たちは遊びに行ったりしていましたが、今はどうしているのかなと思います。
- 大船渡市は子育てで事業が充実していると思います。無料で支援センターに行け、親子も楽しめる施設がたくさんあり、子育てで支援が充実しているので子供を持つ世代にはよいのではないかと思います。



- 子供用品が売っている大きなお店が大船渡にないのが不便です。
- 都会に比べて通勤時間が短いことが多く、仕事が終わった後の自分や家族との時間を多くとれることも大船渡に戻ってきた理由になっています。



### 大船渡の高校生に対する思い(社会人)

- 高校生ながらの遊ぶ場所がなくて高校生たちは、土日はどうしているのかと思います。大人には車があるから交通手段はありますが、親がいないと遠出できないのはどうなのだろうと思います。
- 前はボーリング場や、カラオケ、スケートリンク等、遊ぶ場所がありました。震災後になくなってしまいました。
- 一度大船渡を出て、それで交友関係は広がり、縁が広がったのはよかったかと思います。考えるより実践してみて、合わなかったら職場変えてよいと思います。そこが全てではないので、自分が本当にやりたいことは、やっていけば見えてくると思います。
- 高校生たちはこれから、もっと広い世界を見て、そこでいろいろなものを感じて、それでさらにここにいたいのか、戻りたいのかというのが選択肢を広げたらよいと思います。いろいろな物を感じるのは経験になるのでいい事だと思います。残りたいと思うのもいいと思いますし、選択肢をいくつか持っているのがよいと思います。今は、視野を広げるのは難しいかもしれませんが、進学・就職した所で色々経験をして、本当に自分が納得してやりたいことを見つけてほしいです。
- いろいろ経験して、失敗して、可能性を広げて大船渡に帰って来てほしいです。そうすると大船渡も活性化すると思います。若い力が必要かと思っています。



■海から望む中心市街地(大船渡町)

### 3.防災学習ネットワークの形成

当市では、東日本大震災の大津波により、沿岸部の地域が未曾有の被害を受けた一方、被害を免れた内陸部の地域では、震災発生直後から被災地域への後方支援活動に当たり、早期復旧に貢献したことから、その経験や教訓を次世代に引き継ぐとともに、防災について広く学べる場を創出することにより、災害に強い多重防災型まちづくりを推進することとしています。

このため「(仮称)防災学習センター等整備検討官民会議」を設置し、基本計画策定に向けた検討などを経て、令和2年12月に「大船渡市防災学習ネットワーク形成基本計画」を取りまとめました。

基本計画では、当市の防災学習について、単一の施設で担うのではなく、市内の既存施設に特徴を持たせ、連携・回遊を促すことを基本とし、地域住民との協働による持続可能な運営を目指しています。

この計画に基づき、市の中心部にある大船渡市防災観光交流センター(おおふなぼーと)をゲートウェイ(玄関口)と位置付け、市内各所の紹介や誘導を図るとともに、震災当時避難所であった赤崎町の漁村センターを防災学習館として整備し、東日本大震災の伝承や復旧・復興だけにとどまらず、近年、頻発している台風や大雨等の大規模自然災害への備えや危険性などについても学ぶことができる総合的な防災学習の場として整備することにより、当市における防災・減災に向けた取り組みを推進することとしています。

## 大船渡市防災学習ネットワーク形成基本計画 (抜粋)

### 1 基本理念 大船渡市における津波伝承及び防災学習の基本理念は以下のとおりである。

#### (1)津波伝承及び防災学習に向けた考え方

##### ア.津波災害・避難生活の伝承

津波災害、避難生活及び復興に係る総合的な経験を確実に次世代へ伝承する。

##### イ.既存施設の活用・連携

市内外の類似施設の状況を踏まえ、「大規模な施設改修は行わない」、「既存の施設に各々特徴を持たせ、連携・回遊を促す」ことを基本とする。

##### ウ.官民協働

持続可能な運営モデルとして「地域で盛り立てる官民協働」を目指し、地域住民との協働により運営する。

##### エ.防災・復興に係る総合的な防災学習

津波災害だけではなく、洪水、土砂災害等に対する備えや危険性のほか、復興についても情報発信を行い、災害に対する総合的な防災学習・備えを促す。

#### (2)防災学習ネットワークの考え方

おおふなぼーとを中心に、市内の津波伝承施設、遺構等と連携を図りながら、災害の教訓、避難生活、地域の備え等について、多面的な学びと伝承を促すこととする。

##### ア.「知」のネットワーク形成

東日本大震災を契機に「減災」や「共助」という考え方が注目されるとともに、被災地内外と連携した復興活動も随所で行われ、そこから学ぶべき教訓や知見を生む「知」のネットワーク拠点の一つとして、減災社会実現へ向けた情報発信を行うものとする。

##### イ.市内外の施設との役割分担

市内の既存施設及び陸前高田市の「東日本大震災津波伝承館」等と連携を図り、相互に補完し合う施設として導入機能・活動を位置付ける。



## 2 防災学習ネットワークの連携・回遊のイメージ

### 盛町 被害・復興の象徴を交通機関から学ぶ

盛町につながるJR大船渡線はBRTという新たな姿での運行が始まり、また、三陸鉄道では、復旧と全線開通により、沿岸地域の復興を見て、乗って学ぶことができる。

### 大船渡町 産業復興の取り組みを学ぶ

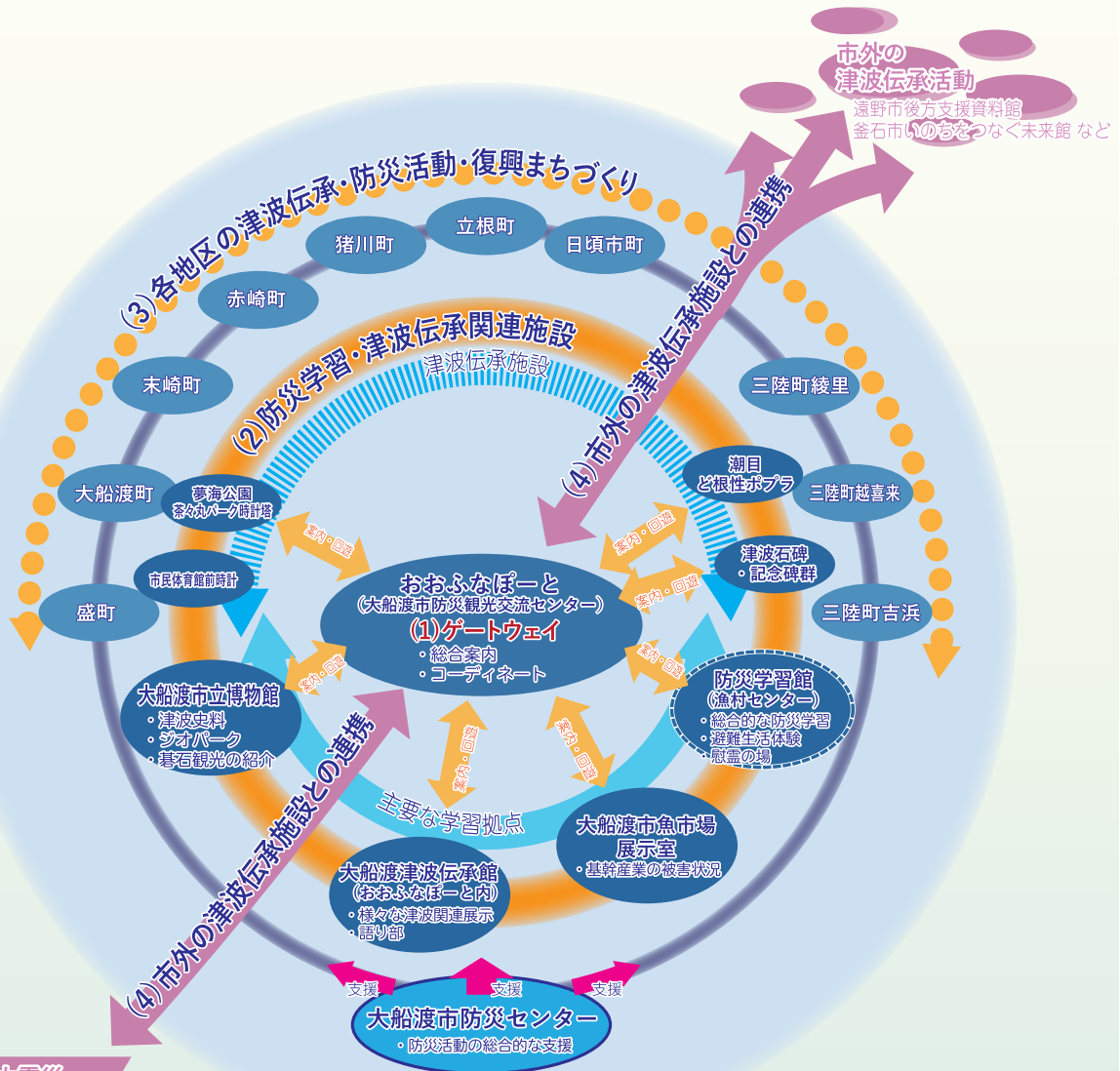
大船渡漁港やキャッセン大船渡など、復興を通じて整備された新たな拠点のにぎわいを見ながら、生業を復興することの重要性・意義を学ぶことができる。

### 末崎町 地域の頑張りと新たな活力を学ぶ

「浜の停車場」、「細浦復興朝市」、「観光モニターツアー」、「りあすの丘」等、被災後も粘り強く地域の再興に取り組んでいる。また、被災跡地に立地する大規模なトマト工場には、被災後の新たな活力を感じることができる。

### 赤崎町 避難生活を学ぶ

中赤崎復興委員会で取り組んできた小中学生を中心とした防災学習により、避難及びその後の避難生活から得た教訓や知恵を学ぶことができる。



東日本大震災  
津波伝承館  
(陸前高田市)

### 吉浜 高台移転の意義を学ぶ

過去の被災体験における高台移転により、東日本大震災の被災を免れた「奇跡の集落」、津波石碑等から、住まいの復興における高台移転の優位性を学ぶことができる。

### 猪川町 立根町 日頃市町 共助の在り方や津波以外の災害を学ぶ

東日本大震災時には、被災地域への支援活動、応急仮設住宅等の建設による新たな住民の受け入れなどを行ったことから、被災後の共助の効用や苦勞、これからの在り方などを学ぶことができる。急傾斜の多い地域では、土砂災害等のリスクも高く、津波時とは異なる災害対策・避難などを学ぶことができる。

### 綾里 「復興地」の教訓を学ぶ

昭和三陸地震津波の後に高台移転地として造成され、東日本大震災の被害を免れた「復興地」等から、災害復興の教訓を学ぶことができる。

### 越喜来 津波の威力と防災対策の重要性を学ぶ

津波に耐えた「ど根性ポプラ」、旧越喜来小避難階段、潮目に残る資料や集う人々、まちづくり委員会の取り組みなどから、自然の脅威と防災対策の重要性を学ぶことができる。